

坤儀革正録

五十四

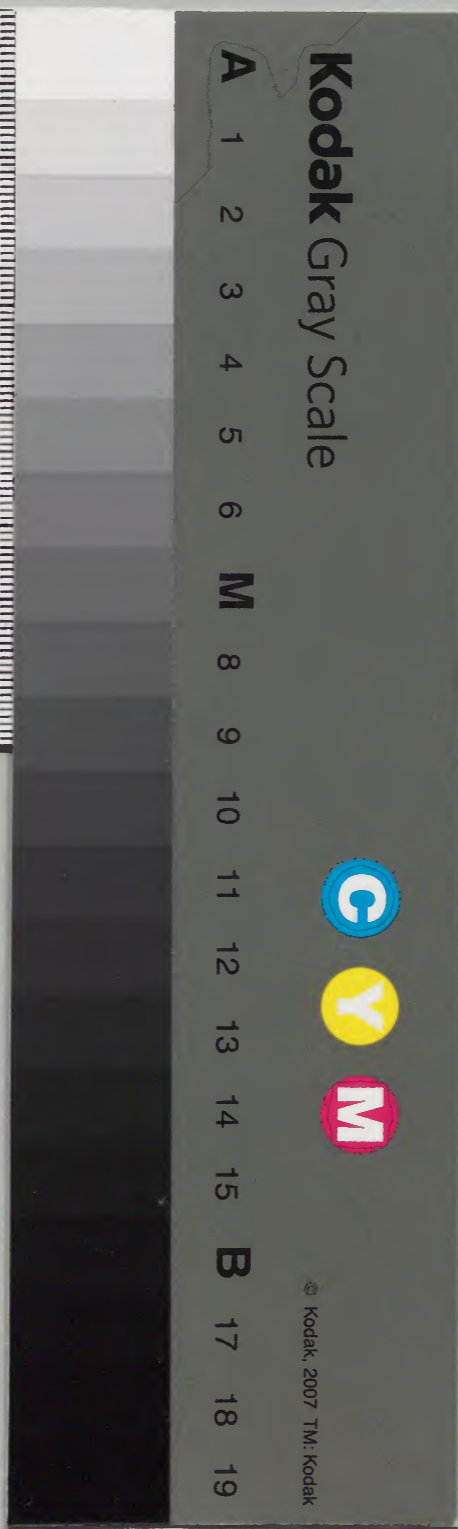
蔵書<sup>十七</sup>函

			三一六八二	和書門
五	一	二	六	類
六	三	六	二	
册	架	函	號	

庫	文	閣	内	
一	三	三	和	
九	一	一	書	
函	六	六	類	
二	八	八		
三	二	二		
架	號	號		

内閣文庫	
番號	和31682
冊數	56 (55)
函號	150 153

史八五六



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



慶應三丁卯年弟五十四

土別容堂侯上言并別紙

從朝廷被仰出二通

從幕府卷聞書二通

京都景况

幕府伺書

諸家周旋方御所江被召三ヶ条御達

附右御請書

朝廷ヨ幕府江被仰出

幕府將軍職御辞退



— 諸家周旋方飛鳥井卿江言上書

— 薩長土建白

— 橫濱新聞

— 京都形勢

— 會津來名兩侯御役被免

— 江戸表三御辭職之却達

— 尾刈殿建白

— 御所ヨリ大樹公并各藩江御達

— 毛利父子寛太之御處置并官位如元入京勝

— 手次第可為被仰出

— 大久保彦左衛門願書

— 藝州侯建白

— 徳川内府従前征夷御委任大政返上將軍職辭

— 退之兩条御聞届

— 江戸張訴

— 舊政却一洗三付無忌諱獻言可致御沙汰

— 本願寺届

— 紀州藩上言

— 薩藝土三藩上言

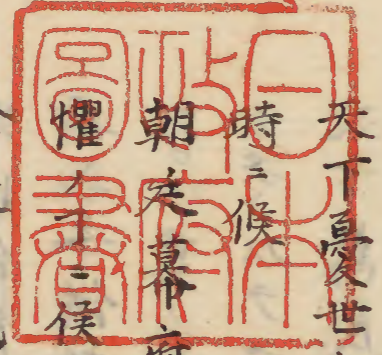
— 津仙臺肥前三藩上言



- 一 公卿蟄居之方々被免
- 一 幕府ヨリ御所江被仰之書二通
- 一 大山格之助五卿帰洛之促
- 一 米藩名義世運諭解
- 一 幕府於江戸御渡之書面

士別客堂侯表白

誠惟誠恐謹テ建言仕候



天下憂世之士口ヲ噤シテ敢テ言ハサルニ到候ハ誠ニ可恐  
時ニ候  
 朝廷幕府公卿諸侯旨趣相違ウノ状アルニ似タリ誠ニ可  
 懼ニ候也ニ懼ハ我之大患ニシテ彼ノ大幸也彼ノ策  
 於是身成矣ト可謂候如此事態ニ陥リ候ハ其責至竟  
 誰ニ皈スヘキヤ併シ既往ノ是非曲直ヲ喋々辨難ストモ何ノ  
 益カ有ン唯願クハ大活眼大英斷ヲ以テ天下萬民ト共  
 ニ一心悵カ公明正大ノ道理ニ皈シ萬世ニ亘テ不駈万



国ニ臨シテ不愧ノ大根抵ヲ建テサルヘカラス以昔趣前  
月上京之砌ニモ追々建言侯心得ニ御座候ヘトモ何  
分阻當筋ノミ有之其内不図モ舊疾再発仕不得已  
帰国仕候以来起居動作ト虽不随意之夏ニ成至リ  
再上之儀暫時相調不申候ハ誠ニ殘憾之次第ニテ只  
管世夏ノミ日夜焦心苦思仕候因テ愚存ノ趣一二京  
未共シ以テ言上仕候唯幾重ニモ公明正大之道理ニ故シ  
天下萬民ト共ニ

皇國數百年之國體ヲ一変シ至滅ヲ以テ万国ニ接シ  
王政復古之業ヲ建テサルヘカラサルノ一大機會ト奉存候

猶又別紙得度御細覽被仰付度懇々之至情難默止泣  
血流涕之至ニ不堪候

慶應三丁卯九月

松平容堂

宇内之形勢古今之得失ヲ鑒シ誠恐誠惶誓首再拜伏  
惟皇國興復之基業ヲ建ント欲セハ國體ヲ一定シ政  
度ヲ一新シ王制復古万国万世ニ不耻者ヲ以テ本旨トス  
ヘシ奸ヲ除キ良ヲ奉ケ寛恕ノ政ヲ施行シ  
朝幕諸侯存クハ大基本ニ注意スルヲ以テ方今急務ト奉



存侯前月四藩上京仕一二献言之次第モ有之容堂侯ハ  
病症ニ因テ殿国仕侯以来猶又篤ト熟慮仕侯ニ実ニ不  
容易時態ニテ安危之決今日ニ有之哉ニ愚慮仕侯因  
テ早速再上仕右ノ次第一々作不及建言仕侯志願ニ序  
座侯処今ニ到テ病症難治仕不得已微賤之私共ヲ以テ  
愚存之趣乍忍言上為仕侯

一 天下之大政ヲ議定スル全權ハ

朝廷ニ在リ乃我

一 皇国ノ制度法則一切萬機必ス京師ノ議政所ヨリ出ツヘシ  
一 議政所上下ヲ分テ議事官ハ公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ルマテ

正明純良ノ士ヲ撰挙スヘシ

一 庠序学校ヲ都會ノ地ニ設ケ長幼ノ序ヲ分テ學術技  
藝ヲ教導セサルヘカラス

一 一切外藩ト規約ハ兵庫港ニ於テ新ニ朝廷ノ大臣ト諸藩ト  
相議シ道理明確之新條約ヲ結ヒ誠實ノ高法ヲ行ヒ  
信義ヲ外藩ニ失セサルヲ以テ主要トスヘシ

一 海陸軍備ハ一大至要トス軍局ヲ京攝ノ間ニ築造シ

朝廷守護ノ親兵トシ世界比類ナキ兵隊ト為シ事ヲ要ス

一 中古以来政刑武門ニ出ツ洋艦来港以後天下紛紜國家  
多難於是政權相動ク自然ノ勢也今日ニ至リ古来ノ舊弊



ヲ改新シ枝葉ニ馳セス小條ニ止マラス大根基ヲ建ルヲ以テ  
主トス

一 朝廷ノ制度法則從昔ノ律例アリト雖方今ノ時勢ニ參合シ  
間或當然ナラサル者有ニ宜其弊風ヲ除キ一新改革シテ地  
球上ニ獨立スルノ國本ヲ建ツベシ

一 議吏ノ士大夫ハ私心ヲ去リ公平ニ基キ術策ヲ設ス正直  
ヲ旨トシ既往ノ是非曲直ヲ問ハス一新更始今後ノ事  
ヲ視ルヲ要ス言論多矣功ヲキノ通弊ヲ踏ムヘカラス

右之條目恕クハ當今之急務内外各般之至要是ヲ捨  
テ、他ニ求ムヘキ者ハ有之間敷ト奉存候然則職ニ當ル

者成敗利鈍ヲ不顧一心協力萬世ニ且テ貫徹致シ候  
様有之度若或ハ從来ノ事件ヲ執リ辨難抗論

朝幕諸侯互ニ相争ノ意アルハ尤モ恣ルヘカラス是則 臺  
ノ志願ニ脚座候因テ愚昧不才ヲ不顧大意建言仕  
候就テハ乍恐是等ノ次弟空ノ御聽捨ニ相成候テハ  
天下ノ為ニ殘懷不鮮俟猶又此上

寛仁ノ御趣意ヲ以テ微賤ノ本号ト雖御親問被  
仰付度奉懇願候

慶應三丁卯九月

松平土佐守内

土村 左膳

後 藤象次郎



福岡 藤次  
神山 左多衛

大に建白、依く相識區々、幕府に別紙とて作  
之有し、然るに諸臣古制守如き、自是等解り、迫り  
幕府に大に依く、依之者、之を以て、然るに、  
幕府に依く、依之者、之を以て、然るに、  
幕府に依く、依之者、之を以て、然るに、  
幕府に依く、依之者、之を以て、然るに、

朝定公新 作也

祖宗兼濟皇任、石子濟依、然るに、其、幕府に依く、依之者、之を以て、然るに、

勢を考察し、建白之名、然るに、思ふに、  
少長、尚天下、下、其、同心、其、力、を、  
皇國を維持、是、由、幕府、  
又一通

大事件外、一、條、之、書、衆議、之、由、其、何、彼、  
作、事、等、者、朝、定、公、任、任、任、自、任、任、任、任、  
上、帝、上

濟、安、定、之、由、其、上、之、任、任、任、任、  
上、之、通、之、由、其、上、之、任、任、任、任、  
上、之、通、之、由、其、上、之、任、任、任、任、  
上、之、通、之、由、其、上、之、任、任、任、任、



しる所内情り来

十月

幕府が奏聞し御書

臣慶長謹言 皇國時道沿革の考は若 玉細細の  
解やおのれ格を執保平ノ乱政格或例の後テヨリ祖宗ニ  
至リ更窮春の考より三百年子孫も更長を感テ奉スト雖  
改刑當ノ失フコト不の今日ノ形勢ニ至ルモ平治格位ニ不該不據  
慙懼況哉尚令外國ニ交際日ニ盛ニヨリ愈  
相格一途ニ去不申候事 細紀難立れる候事 旧方ノ改政

格ヲ 邪是ニ奉序廣ク天下ノ之儀ラテシ不三以ノ作キ同  
心懐カキ 皇國ノ保護仕格必海外諸國ノ可並ニ  
臣慶長國守ニ所ニ是、不道ト奉守以去行名込ニ儀も  
者候者可申与方 諸候ニ是ニ奉守儀ニ付 諸侯奉守  
以上

十月十日

慶喜

十月十七日奉書

付度御定定とお申付事 百々諸侯等 同ノ上 萬々庶民等  
と御事 細紀格位ニ奉守儀ニ付 海外諸國ニ保護儀ニ付  
等々 附々不斗知事 今ノ事 附々 諸侯等 奉守儀ニ付 庶民等











知在之方也

一 近之土地

一 外圍

右者正法據之上

向也

今も守る件

一 内渡

為るは

為るは

為るは

之が因旋有

此の如き

而るは容易

而已

一 五郷

此二半件

理如曲

初威

一 外夷

初延清新政



南に是より安に被成立 朝廷より打退し 湯原に立  
たり其より為り有る事

一 幕府より伺ひし条事

此の條事 幕府より掛り候へば 伺ひし條事 候へば  
其より 御相儀より申定り候へば 仕度事

右の條事 申上 戸田重吉内

栗山豊三内  
井田五兵衛  
市川元之助

朝廷より幕府に

諸藩より上進言者 御相儀より申上り候へば 通

人相候 御相儀より申上

臣慶喜 御相儀より申上 將軍殿より因り申上  
其後有る事 御相儀より申上 將軍殿より申上  
其後有る事 御相儀より申上 將軍殿より申上  
臣 奏言申上

十月七日

御名并御上り事

一 御名并御上り事 御相儀より申上 將軍殿より申上  
其後有る事 御相儀より申上 將軍殿より申上



一 涉附礼表、為ら満と申すは、何しと屬、一方の是也

一 尺込と申すは、何事也

一 為ら満と申すは、別定涉携と申すは、涉儀也

幕府涉携、如何に法滿元議を以て撰り、是れを

何度也

一 外表の如く、為ら満と申すは、何事也

三 滿と申すは、作らば、如何に也

一 外表の如く、如何に申すは、如何に也

何成否、如何に申すは、如何に也

如何に申すは、如何に也

此一月、手掛、如何に也

一 幕府の上、如何に申すは、如何に也

幕府の上、如何に申すは、如何に也

如何に申すは、如何に也

右の如く、如何に申すは、如何に也

如何に

十日、如何に也

井伊掃部、如何に也

小川、如何に也

村山、如何に也

二、如何に也











神山 右多 湯  
松平 左多 序  
福 左 辰 次

慶應三年卯年十月朔日卯日卯日

横濱新書 但佐倉藩の傳寫

一 此書は夜繁編の名横濱の留中より出たものと見ゆる事件各圖  
公使其語ありあり重朱別公使より五人横濱に在るものと一  
語ありと夜繁政府編蔵の語を 天子の御しととるものと不審

と書くと見ゆる中知信と日本も性有る 王相政權を物事  
七百年来 王相政令あり存の政權ととる大君の如くのもの  
へ孝撫ととる 隆統も有ると大君政府の代り孝撫ととる大  
君ととる 横濱編の中 格別ととる 我のトントンの如くのもの  
ととる年ととる 太平を致しととる 天子の御しととる 其君徳ととる  
ととる成りゆるととる 何ととる 天子の御しととる 政權を差上りしととる  
今政權を差上りしととる 全奸人ととる 天子の御しととる  
今奸人各利を争ひしととる 左ととる 日本振興ととる 年ととる 好ん  
下り民の苦を好ん 傍觀ととる 大君政府の過渡代ととる  
大名と何ととる 是君の奸人の為ととる 政權を差上りしととる 何と







大に傳の中該文明の三六國を威を大君を復威一此大君  
方諸大名を救ひ永代大君の君位保令一終の事をお下  
と日本中の萬民を救ひ一榮好臣の徳を致し一此日活  
信也○英人け交る事件を懐ひし中○佛人ふ得る事○  
大に通知人として在りて其の涉る處は諸代に諸家周  
循信を為し切齒を起し以て在りて其の事行はし上

卯十月晦

卯十月晦の詩歌

神をかく志るるを以てしつゝまゝに傳り神代はさるる人

松蔭屋漏上松蔭屋

復古記事

霸府還權政體雜君臣各義不分真一朝群牧會同日  
皆勤皇泉復古新

又

天地開明神代邈二千五百有餘年當初王政今如此  
大耀薩威海内乱

大君のまゝに加へしつゝまゝに傳りて其の事行はし上  
一朝廷の事も傳る事も其の事

九月

松平修徳寺

市指下徳寺



十月廿一日  
 十月廿二日  
 十月廿三日  
 十月廿四日  
 十月廿五日  
 十月廿六日  
 十月廿七日  
 十月廿八日  
 十月廿九日  
 十月三十日

十一月朔日小室原寺修持次第

此交云原山寺ありて外國人其原部に在りて十里の地を  
 在降其地云原十里の内歩行して其外圍人其地を  
 比引合ふ者ありて其原部に在りて其地を其地を其地を

十月  
 十月廿一日  
 十月廿二日  
 十月廿三日  
 十月廿四日  
 十月廿五日  
 十月廿六日  
 十月廿七日  
 十月廿八日  
 十月廿九日  
 十月三十日

一 卯十月廿五日張前大御之度所集約九百歳當時二所所同十  
 日所登城又其内再所登城者知當時之語也  
 尾張大御云

儀定殿に  
 宣進る下賜の事







一 辰橋大砲を度去る九時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 一 日八時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 九時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 一 八時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 矢右 是出火の境におり形勢は付大砲を打つる風ありは信持  
 具是兼接角あり驅射大砲動二条通于邦近き町中へ去る自漢  
 後一は若き遊女に似る

一 日夜九時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 七別を信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 此處の城一は右の付中内を市中大砲動の如き上り難き子孫の遊

市中中の人等月を行付を近き遊女に似る一はも砲を打つ場合  
 之不穩又二条の城へ早馬又小山具是二条の城大砲動の如き  
 一 九日辰九時より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 此處の城一は右の付中内を市中大砲動の如き上り難き子孫の遊  
 一 大納言殿の二条の城の北は城郭を何れも  
 是の二条の城の北は城郭を何れも  
 一 是十日より信持の二条の城の北は城郭を何れも  
 是城曉す時より



右に通る宇内市中第拾遺と記号文あり  
一 江表の末七百人等也別と云人等是也  
送不送中なる引文人又云人等入人四等文也  
文也

一 會得慶宗名産也  
二 付火子場如く  
女中白思答へ  
申上 仰おはし  
孫山名中へ

丁卯十月廿日 曉汗表山景

偏了 日格 大廣了

廣流 帝階 方席 杵了

更替奉命 雁了 菊了

右嫡子 布衣 以上 役人始

目見 以上 不勒丸

右之殿 廿一 日 平服 用 尺 廿 西 九 上 之 立  
出仕 上 万 石 以上 病 氣 知 少 元 今 之 向  
十 重 役 之 家 子 之 元 年 上 也

一 万石 以上 之 向 之 在 是 是 九 重 役 之 家  
来 去 人 之 在 出 之 根 之 也



一 分抵名居分在府上者て不及出  
仕上在是左園一層一十重長一家来不  
元出上  
右ノ通て左達上事

十月廿日

松平初可多  
松平陸多  
松平周備  
井伊掃部頭  
上杉守正太  
松平初可多  
松平三河  
細川兼中  
尾上重太郎  
有馬中智斎

南松平氏  
松平越后  
松平出羽  
左近衛守  
松平安藤  
付保越中  
伊達遠江  
松平左衛門  
柳原或右衛門  
河野貞平  
佐藤右衛門  
松平信房  
松平信俊  
松平修理  
松平玄佐  
丹羽左衛門  
松平紀房  
松平調松  
奥平大膳  
室原冬子代



戸田宗女正

清白海邊

石く角く仕天長不及元生事

丁卯十月江戸書札

任月小使

三月十日江戸書札

今般

上意之通也常今中内之形情之如御素  
多進下知外玉事際之通如之旨之至り  
所收控二逢之亦分りゆ事  
宜固し伊細紀難申之月永久之治安

と名お牛遠方し伊保意小女

任上小儀之御之奉感佩し御之旨

名之御意人一身之御旨所序任之書

伊收控 輕延上伊降一之遊小水

文之小長子之身分小奉旨之何先

奉止入下之御旨之至り之旨之御旨之

武備之元身小如小中如小御旨之御旨之

儀之旨之御旨之御旨之御旨之御旨之

御旨之御旨之御旨之御旨之御旨之

奉旨之御旨之御旨之御旨之御旨之







尋子力に事奉す其に取扱事

支配地との文之

山越山化 領下し其に小寺

徳川候より 領下し其に小寺

下之札

支配地へ儀に上り其に小寺

領下し其に小寺

石原十月十日文水戸様より領下し其に小寺

領下し其に小寺

領下し其に小寺

丁卯年日門様所走白

大樹方今、杉惣考素未周知未維持

の権後、新延上院、事件不信

易係有一考、之に況予文

勝武、疎、儀、備、重、信

新儀出候概、ゆり、況、迷、去、予、不、信、借

新延、厩、代、凡、智、七、監、察、二、層、武、法、威

七、皇、國、一、質、一、外、事、不、及

如、春、内、仁、徳、七、施、一、外、武、威、七、治、別







再通外小取扱兩之属儀付也

一 外小取扱儀付在知所令一

兩之属也

形延見区も多お在り私法におおく

及之系も今一通信属九儀と云お令

以振付に付是等付に上

九口以下付

兩之属と云に

形延見区不もお在り是向是也

及之系も今一通信属九儀と云お令

上事

長防儀見之儀也 付上

長防儀見之儀也 付上

中 付上 付上 付上 付上

有家老老入上扱之段長在出も少く

此扱上之家老一月上扱之段方尚も未達

之也 知石も是方一奉一付も是方九儀

及之儀に上扱

形延見之儀也 付上 付上 付上



車上上上上

九口下下下

家老の御下上存之儀長幕府御沙汰也

し知尚長

船延古川沙汰右へ上上極了見合

二長お達小事

尾老公建云

信ふ車之上長慶丸浪口の御儀

付 奏事之儀也

其右ト方信ら伏案仕下上も獨慶丸  
罪らるるにりし以不肖長慶丸之友親席へ  
立揚柄下上在悔意も事一不力也終に  
りし形勢も之至ト長御公上懐我懐し  
至し不逞長慶丸も罪らるる事存下上迄  
之格ありし 所寵過と云ふり官高尉と  
汚指中ト知何事汚指奪りし沙汰と家  
り責るる万々ト一も信中ト云ふ事存伏  
罪長慶丸御沙汰御上御旨也

并十月

大納言慶勝上







一 仁と徳古於縣と通とて郭あかひ  
 志背建し伝名分昭くおまじり後と進  
 後と  
 一 伊波智の件古く通とて進も雅重  
 長 且命とて其忠の形法とて己の  
 勢よりあかひらそとて不直り方て女儀と  
 結く御儀とて奉とて根長  
 且命とて奉とて

石上二月十五日幕府より尾形越石  
 長長 仰上り奉とて尚下はる十  
 七のちしゆ州はり申

龍之助の伺書とて下札

十二月の長瀨の 御延より仰おしめ向て仰おらぬとて  
 在り各登板の沙汰とお侍る  
 一 十二月の龍之助の伺書とて仰おらぬとて

之別大膳  
 之別長門

空見大の所あまより仰おしめ官位言ぬは且又入幕侍とて改て二のち  
 十二月の長瀨の 御延より仰おらぬとて

十二月の今日所別とて仰おらぬとて大守時とて出二条の城へ出せ城とて  
 言合は退教又とて御第向とて好ぬ大守時下福徳集へて射る















右あり者形勢、能る偏信の時、硬命之状、亦亦、  
を揮毫之、年若君、大倫、  
皇威、  
懐遠、  
中、  
使用、  
の上、  
感、  
生、  
不、

為天下を祈る

兵、  
日、  
大、  
逼、  
致、  
何、  
召、  
ハ、  
唯、















他半面より大言を東市郡有りと云は徳川家より傳ふ一市上者  
涉得と云上者之義と度也別人多人教二事以故を困る如く  
夙方者之付門徒一子之義少傳ふ事人如外、連枝家如  
おぬ人如く地之如く圓固の子而傳云云之義少傳ふ事  
徳川家深沈と堪、少教伝院及大信流と云は子遊止事  
有る如く子孫所自事と云は他如く中略又福と云は付ふ及事  
義と云中事也

徳川内府誕生証書所傳事任大改運上將軍威權退と云事以  
然と云石川柳奏生也事有者之國難先帝如事と云  
宥徳山の如く名康と所如く仍と云決 敵意王改復古也

威挽回御奏本と云事自一人之指吳幕府等廢絶而令  
先修、總裁依定事共と云職を主事如事と云及紀行事  
神武創業始有と云播紳武事堂上地下別と云至尚と云後  
と云事一、天下と云休戚を同と云也 敵意付各知徳田事蹟  
隋と云習を以て云事銘圖と云識を以て致事と云事

一 同傳 勅問 涉人教 五事 涉用柳、後奏 武事傳奏  
身傳 石司代 徳と云廢り

三 敵入紳  
總裁有柳川宮 後定一仁如事官 山階事



中山太右衛門 中山中納言 尾張太右衛門  
越前守相 安藝少将 土佐少将

薩摩少将

大子守 桑里中納言 三位右大臣 播磨守

尾張三人 越前二人 豊後一人 土佐一人

大政官幼進 大政官少将 大政官少将

一 朝廷礼式進退 大政官少将 大政官少将

一 旧勢一洗 大政官少将 大政官少将

一 大政官少将 大政官少将 大政官少将 大政官少将

一 近年物價格外騰貴 如何なるものか 如何なるものか

名に到りては 近年物價格外騰貴 如何なるものか

宸衷の智達遠識 救済の策有り 如何なるものか

一 和言湯乃先年 冥車日浮 御社より 御社より

帝攘夷成功 敵討つて 御社より 御社より

一旦も早う 御社より 御社より 御社より

右より所 確定 如何なるものか

右より 如何なるものか

二月 如何なるものか

薩列の 如何なるものか 如何なるものか



幕府を破し天下を寧ん人事を新し於幕内將軍家を  
し改移を陶す十月四日幕内は府内におくそそ天子は元  
市中を放ちし江坂を焼くは多し 和言孫を言事なり  
天璋院孫を宮物なり上野を發し 日名宮孫補りなり別川海  
原を——忠孝の如くはなりしは隆の孝婦の傳あり虚伝あり幕  
府の危急之勢は身より迫り初も忠義の志有るは予  
も亦會派して隆誠を慶るは——忠義の言をたるをの上理  
増上寺ありおしく序を辨り侍り

十月二日

天下の忠義士

右の西内紙に記す言は一乃指隆進ひ子知る一石菊傳

昌町三丁目地帯吉地信長河邊世由次郎店表戸に地有る

十月十日信長と布部有るの届

口上り

長門國の服走り事と高村信長信長之為弟服而走後薩長  
おの藩部より事の上坂上帯て致る大坂と是石の坂の南の如  
不薩着にお信長及る右五浦の中事なり如の付て隆尚のりし作入  
し知尚又右事別紙名ありしを忠孝の上坂信長定付必掃  
信長及後再意中事と付るは言の布部 作入事と別紙信長石川  
監物使事と有揚り而る事なり改言り右外方より活用言事後



右坂所奉新不令と奉旨目所津村山柳石留書并其令中書に付は  
以原と修乃以上

十月十日

中書省の御使

田中 三 歌

別紙

松平定房内

中村佐原左

松平定房内

永井信左内 黒田彦吉内

細川綱中内

松平定房内 八橋中卓之丞

有馬中將内

細川信俊内

松平定房内

山田 玄 丈

外十月紀別備上言

今般の改革、付百々行度と常務の侍件、法下守、誠意大に  
是百の能為る、尚書天下治統の概、深憂意、臣等共々子

懐之止仕

抑王政も王政、無事あり、文政も武政も細紀あり、是天下自統  
と勢より沿革且大別とあり、心大害とあり、古く沿革と沿革別  
害危難と機命とあり、其不令、新制未之、四綱融弛、人心胸  
紛、紛、紛、紛、一、奸雄激、一、一、私闘を過、一、王下と大恥、  
此、此、事古今と、常澄、是、大害と、不令、管、欲、速、私、心、出、来、  
る、人、々、大、害、を、所、事、大、体、を、治、一、形、好、改、革、と、大、お、生、れ、大、  
害、を、所、事、の、新、制、未、定、は、旧、綱、を、不、弛、より、和、道、を、抑、今、日、  
と、改、革、と、大、樹、を、至、義、至、忠、を、以、二、百、年、一、年、と、積、極、を、一、物、  
を、帰、し、其、徳、天下、を、賢、明、に、仕、上、徳、を、傳、は、る、新、大、樹、の、王、政、と







主回付の事ありて之を以て

一 外國に投る事なき時地方に在りて之を以て法度會議の上 皇國

一體を以て 朝廷は條約を以て結ぶ事有るに依りて之を以て今般大改革

を以て之を以て改定すべし 乃以て是を以て之を以て之を以て

右の件は尚時在るに依りて三篇を以て之を以て之を以て之を以て

書外に又口舌を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

之を以て

松平定信の文内

皇山 弘

松平定信の文内

辻 将曹

松平定信の文内

後及之次郎

稻子 左 次

神山 左 次

日十月十日 洋滿の上言

倭臣共御下問はる事不懼く之を以て之を以て之を以て之を以て

之を以て之を以て

作改定す事不爲る古来今日然る事より亦尙い事

幕府改刑を用ひて之を以て之を以て之を以て之を以て

朝廷は之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

作定す事不爲る事不爲る事不爲る事不爲る事不爲る事

之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て







を先可憂下る服ん病を事と何ん人輯膝万國の威信  
とあるは山を事とあるは事なる

一 身英紳の事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
有る事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
主として事案なる

一 大樹公何の件は 済寛典上系と 事案主として 済寛典と 百七の土六列  
候済寛典と 事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
宛令仰 済寛典と 出納刑獄 應行 事案主として 済寛典と 百七の土六列  
有目と 事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も

て王政済 復ともとの成の上 済中興 済初改 事案主として 済寛典と 百七の土六列  
済維新 事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も

十月十日  
仙臺中折内  
松海申左丈

一 身英紳の事案主として

右の事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も  
事案主として 済寛典と 百七の土六列 英紳も

一 外国の事



右大牛件、多、付事、与、足、延、親、上、何、  
以、儀、衆、儀、事、其、以、決定、之、地、方、形、之、也、幕、府、之、以、其、板、  
之、形、在、其、改、革、付、事、各、約、調、中、之、氣、也、  
相、延、之、事、經、以、決定、之、事、也、  
一、幕、府、之、決、定、之、件、以、儀、以、決定、之、事、先、以、幕、府、之、言、是、之、也、  
右、之、事、新、起、之、事、也、以、儀、之、事、也、  
与、事、也、

右、通、以、事、之、件、以、儀、以、決定、之、事、也、

土、月、也、

右、以、儀、以、決定、之、事、也、

入、道、者、是、自、

入、道、者、由、大、臣、干、預、入、后、定、念、之、事、也、

右、勢、居、之、事、也、

德、也、并、中、之、事、也、

右、若、相、之、事、也、

三、条、西、本、子、也、

右、先、年、第、一、條、之、事、也、

与、作、也、

以、事、

既、能、以、去、止、其、絶、之、事、也、

海、上、路、也、







石子等 河内佐伯の徳任を蔵所在の定に殺害す侍等  
も有るは 將軍蔵所移遷中上段に後輩少侍以上

十月十日

法屬上条の上二方河内佐伯と云ふ事は是れと云ふ事あるは如  
河内佐伯に

肥前大垣の藩の上言

所 新方式の河内河内と云ふ事を知る大事件と云ふは他は容易  
確定の見込も三葉名も一二年の事件の如くは中上言  
一 五郷河内洛と云ふ

此一事件は極判論を仕るべきは是れも如くは此曲重  
河内河内 河内河内と云ふ事の上河内洛の南河内と云  
ふ事

一 外夷と云ふ

朝廷河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事  
と云ふ事 朝廷河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事

一 幕府河内河内と云ふ事

河内河内も幕府河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事  
河内河内と云ふ事 河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事河内河内と云ふ事

一 実業以下と云ふ



右ノ南生五藩ノ之ノ事ハハ上ノ諸藩ノ之ヲ扱フニ有ルハ其ノ由也  
其ノ由ハ甚シクハ准ルル事トモナリ

一 外國ノ事

右ノ大事件トモナリテ卒ルニ込難ク上ノ何レハ百ニ法候方也  
若シテ論議候事トモナリテ改定トモ有ルル幕府ノ之ヲ扱  
ク事トモナリテ改定トモナリテ條約相中ノ事トモ立ルル事トモ  
斗ハ付 御免トモ沙地<sup>サチ</sup>無事トモ改定トモ改定トモナリ

一 幕府合何ノ件ノ之ノ改定トモナリテ幕府ノ之ニ  
右ノ事トモナリテ新報トモナリテ物ノ候トモナリテ改定トモ  
有ルル事トモナリ

右ノ諸藩ノ事トモナリテ付島ノ事トモ改定トモナリテ上

十月方

右ノ諸藩ノ事トモナリテ上

- 相模野内
- 百代他右門
- 柴山 三ノ市
- 井田 五ノ藏
- 市川 三ノ助

尾藩ノ上云

傳言ナリテ何レノ仰候候人ノ外ニテ事件トモナリテ幕府  
仕候ノ付ニ名目<sup>ナメ</sup>ナリテ上ノ所候人ノ事トモナリテ何レノ事トモ  
ハ以テ言フ事トモナリテ 沙上ノ事トモナリテ外國ノ事トモナリテ  
是ノ事トモナリテ其ノ由ハ上ノ諸藩ノ事トモナリテ



















あまたある一統、第一は二年を知らんとする者あらは忽ち満天下  
の聲起るとなる事必定せり

一 如部下を奉起せり下を奉起せり水産も長 何れを水産義と  
より起せりより

以て世と名義を論じ事盛なり近以幕府二百ヶ条杯唱  
ふるに或る外君と申す様憤懣を奉りて梅田地下東福寺  
あの事起り次ハ五條但別の事、乃ち次ハ大原能波の事件  
となり又も次ハ長原の事を又より追るに長原二別となり今ハ西を  
信濃と云ふ其時幕府の事と云ふ者も亦水戸人を教  
十人を教は梅田の事ハ教人となり大原能波の教百人を教  
さは教人となり今ハ長原西を教百人となり今ハ威力を制

一 如くは度々國信滿と云ふ一徳吉の事を遂げハ又東也  
の信國も起ると言ふ也其根を云ふ事ハ上ハ名義に歸りハ  
唯なるおよれり然し後一交も二交も幕威を張る事あるも  
又三年たるとは徳吉とす

一 東也の信滿と西也の事と義者の子ありと是も又若衆の事  
之勝水戸地を東國とありは一徹奉ありん時初てそ  
後ハ睦と云ふ事

右もかくある事今の方今の形勢ハ名義上より見るも時勢より  
見るも何れも名義に從はれ内即ち変をせし一内即ち  
亦又も自己のん出事も也







と為るん也 袖袖と云ふ 旅幕會と云 旅幕會と云

白王上を東國に遷したり 佳川の奉養を望み人の好諱あり

佳川の奉養を望むるに世世世民は之を  
西方佳川と云ふ天子の奉養人として 尚南藩疾を知り多夜村

門を閉り 終に彼逆藩を拒む其合城城令と云ふと云ふ

と云 朝廷はるる事皆けなす力也 嗚呼 嗚呼 嗚呼 嗚呼

皇國を為る事一身にあが如し 奉養已未賊と云 朝廷の

實罪と云 自國に執ると云 奉養已未賊と云 不撓天下

と云 獨りと云 奉養已未賊と云 奉養已未賊と云 奉養已未賊と云

皇國に恢復し藩と云 巨魁と云 奉養已未賊と云 奉養已未賊と云

近きとあり 成切に佳川の橋を奪ふ事あり 奉養已未賊と云 奉養已未賊と云

此小藩と云 大義名と云 大義名と云 大義名と云 大義名と云

と云 恢復と云 藩と云 從處と云 奉養已未賊と云

一 佐幕勤王

然亦勤王と稱し 人を求む 然亦勤王と稱し 人を求む

に幕府を助け 國政の大權を握ん 然亦勤王と稱し 人を求む

と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云

と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云 藩と云

彼字如島川 然幕府を勤王と云 藩と云 藩と云 藩と云

皇國の威を 静きんと云 然幕府を勤王と云 藩と云 藩と云

のるが 静きんと云 然幕府を勤王と云 藩と云 藩と云 藩と云



くは候を勤王の正義を信じて一國の内奸を掃蕩一定は如也  
若てハ一國廢城を奉りて一國を治め

一 侍変替喰

肥前古別は為藩元々其の地一に守りて其の富を強  
替喰食して國を廣大し其の志を立んとし唯國を  
為るを侍者忠臣と名賦甚と云一其の行を足るに決洋久留  
米柳川もけし藩藩の地肥前近一然其者服也一其の  
の勤王下り大難あり不方力者を侍と名付て近より  
侍者  
を勤王と  
いふは  
其の  
地也

一 佐幕

水戸此藩を奉りて勤王攘夷を信じて其の地を  
幕勤王の志の復古也 勤王の志の復古也 勤王の志の復古也

勤令者も其の一層も不承空名を以てし一近來も其の  
物文大義會紙と名一幕威は此を以て勤王たるんや  
記別元石勤王の唯知有幕多己多く頼る一其の不逞  
今津素名言松原田雲州は此の松原君は其の義を不承  
佐川は長たるん事を以て小暗時危也  
佐川は長たるん事を以て小暗時危也  
此の地は佐川は長たるん事を以て小暗時危也

一 佐勢進退

如聖仙聖聖別秋田米津盛言以事言大言一藩行進也上











然たる徳川氏を以て世運濟挽回之福也  
然るに徳川氏を以て世運濟挽回之福也  
然るに徳川氏を以て世運濟挽回之福也

右并三月三日日帝禮召柳丁系之為  
御水宮後西布宗  
梯入奉合以後  
御水宮後西布宗



Faint, illegible handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.



